

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19730392
 研究課題名 (和文) エイズ予防行動としてのコンドーム使用を阻害する
 羞恥感情の抑制に関する研究
 研究課題名 (英文) Regulation of embarrassment as the inhibitor of the use of condoms
 as the prevention of HIV.
 研究代表者
 樋口 匡貴 (HIGUCHI MASATAKA)
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：60352093

研究成果の概要 (和文)：コンドームの適切な使用を阻害する羞恥感情の発生因に関して、購入状況と使用・使用交渉状況に大別して検討を行った。その結果、購入状況では、男性では行動指針の不明瞭さが、女性では自己イメージとの不一致が大きな影響を持っていた。一方使用・使用交渉状況には、男性では評価懸念が、女性では行動指針の不明瞭さが、それぞれ強く影響していた。両状況ともに、羞恥感情は行動意図を強く阻害していることも明らかとなった。これらの結果を受け、コンドーム購入時の羞恥感情を低減させる介入プログラムが開発された。

研究成果の概要 (英文)：The first aim of this study was to clarify the causes and effects of embarrassment on the purchasing and using of condoms. The results showed that the purchasing of condoms by males was strongly inhibited due to the vagueness in a kind of guidelines of condom purchasing behavior, and the purchasing of condoms by females was strongly inhibited due to inconsistency with self-image and the purchasing of condoms. Moreover, the using of condoms by male was strongly inhibited due to the apprehension of partner's evaluation, and the use negotiating of condoms by females was strongly inhibited due to the vagueness in a kind of guidelines of condom using or negotiating to use behavior. As implications of these studies on HIV prevention, the intervention method of promoting condom purchasing is developed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	0	1,800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	450,000	3,750,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：エイズ予防, コンドーム使用, コンドーム購入, 羞恥感情, 羞恥の発生因

1. 研究開始当初の背景

我が国において HIV / AIDS 問題は非常に

重要な課題の1つであり、感染予防に向けて
早急に取り組むべき喫緊の課題である。性に

関する経験の増加する思春期以降の青年に対して、コンドームの適切な使用を促すことが、HIV ウィルス感染の予防に効果的である。

青年のコンドーム使用に関して、その大きな阻害因の1つとして羞恥感情の存在が指摘されている (e.g., Helweg-Larsen & Collins, 1994)。コンドーム使用に関しては、購入段階、持ち運び段階、保存段階、使用 (使用交渉) 段階、処分段階の5つの段階があるとされているが (e.g., Moore, Dahl, Gorn, & Weinberg, 2006)、本研究ではこの中でも特に購入段階と使用 (使用交渉) 段階の状況に着目し、これらの状況における羞恥感情の検討を行うこととした。

羞恥感情は“恥ずかしい”というだけの単一の感情ではなく、“おどおどした気持ち”、“ばつの悪さ”といった様々な下位感情の存在する複合的な感情である (e.g., 樋口, 2000)。またその発生因として、“他の人にどう評価されるか気になる”といった「社会的評価懸念」，“このような私は自分らしくない”といった「自己イメージ不一致」，“どのようにふるまったらいいかわからない”といった「相互作用混乱」，“自分のことをみじめだと思ふ”といった「自尊心低減」の4種類が指摘されている (e.g., 樋口, 2003)。

羞恥感情の基礎研究によって過去に得られてきた知見を利用し、コンドーム購入および使用 (使用交渉) を阻害する羞恥感情の特徴を明らかにすることで、そこでの羞恥感情を抑制する対策の検討が可能になるだろう。

2. 研究の目的

本研究は、コンドーム購入時ならびに使用・使用交渉時における羞恥感情が、購入行動および使用・使用交渉行動に及ぼす影響について、羞恥感情の下位感情およびその発生因を明確にした上で検討することを第1の目的とした。さらにこの検討の結果を受け、コンドーム購入行動およびコンドーム使用・使用交渉行動を阻害する羞恥感情の低減を目指したトレーニングプログラムを開発することを第2の目的とした。

本研究は、大きく (1) 研究1:コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情に関する研究と、(2) 研究2:コンドーム使用・使用交渉行動に及ぼす羞恥感情に関する研究の2つに分けられる。さらにその上で、①それぞれの状況における羞恥感情とその発生因を明らかにし、羞恥感情が各行動に及ぼす影響を検討する段階と、②それぞれの状況における羞恥感情低減プログラムの開発を行う段階に分けられる。

3. 研究の方法

(1) 研究1:コンドーム購入時における羞恥感情に関する研究

① 研究1-1として、コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情とその発生因の影響に関する研究を行った。方法は大学生503名 (男性159名、女性344名) を対象にした質問紙調査であった。調査用紙には、羞恥感情の下位感情、羞恥感情の発生因、コンドーム購入行動意図のそれぞれの測定尺度が含まれていた。研究1-1における分析モデルの概略図を図1に示した。

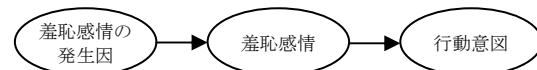


図1 研究1-1および研究2-1の概略図

② 研究1-2として、コンドーム購入トレーニングプログラムを作成し、その効果の検討を行った。方法は大学生および大学院生30名 (男性13名、女性17名) を対象にした2群無作為事前事後計画を利用した介入実験であった。実験参加者は、ランダムに介入群と待機群に振り分けられた。介入スケジュールの概要を図2に示す。

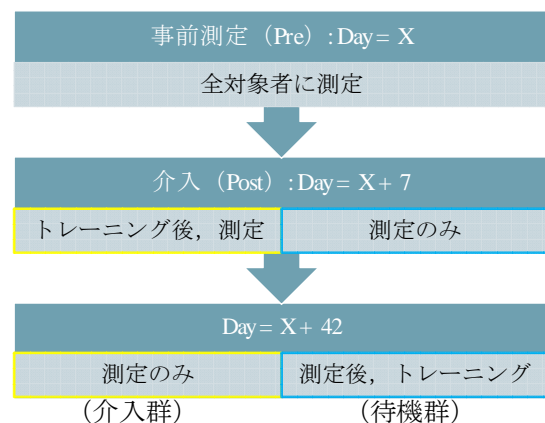


図2 トレーニングスケジュールの概要

(2) 研究2:コンドーム使用・使用交渉時における羞恥感情に関する研究

① 研究2-1として、コンドーム使用・使用交渉行動に及ぼす羞恥感情とその発生因の影響に関する検討を行った。方法は大学生174名 (男性89名、女性85名) を対象にした質問紙調査であった。調査用紙には、羞恥感情の下位感情、羞恥感情の発生因、コンドーム使用・使用交渉行動意図のそれぞれの測定尺度が含まれていた。研究2-1における分析モデルの概略図を図1に示した。

② 研究2-2として、コンドーム使用・使用交渉時における羞恥感情の発生因の詳細な検討を行った。本来であれば、研究2-2としてはコンドーム使用・使用交渉時の羞恥感情を低減するためのトレーニングを実施し、その効果を検討する予定であったが、研究2-1で得られた結果からは、倫理的に問題の

ない形でのトレーニングプログラムの構成が困難であることが示された。

後述するように、コンドーム使用・使用交渉時には男性はパートナーからの評価を気にするために羞恥感情が生じ、女性はふるまい方がわからなくなるために羞恥が生じていた。コンドーム使用・使用交渉が行われる性交渉の状況において、羞恥感情を引き起こすこれらの発生因を直接取り扱うことは倫理的には困難である。

そこでまず、パートナーからの評価を気にしたり、ふるまい方がわからなくなる理由にはどのようなものがあるのかについて、18歳から25歳の265名（男性136名、女性129名）に自由回答形式の調査を実施した。さらにその上で、20歳から25歳までのコンドーム使用経験のない成人483名（男性244名、239名）に対して、羞恥感情、その発生因、使用・使用交渉行動意図の各測定尺度に加え、自由回答によって得られた“理由”を測定する尺度を加えた質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 研究1：コンドーム購入状況における羞恥感情の抑制に関する研究

① 研究1-1：コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情とその発生因の影響

調査の結果、明らかになったのは以下の4点である。1. コンドーム購入行動意図は、男女ともに羞恥感情によって強く阻害されている（男女の順に $\beta = -.55 / -.59$ ）。2. コンドーム購入時には、男女ともに“恥ずかしい”、“いたたまれない”といった種類の羞恥感情を強く感じている。3. コンドーム購入時の羞恥感情は、男女ともに“どのようにふるまったらよいかわからない”といった相互作用混乱によって引き起こされている（男女の順に $\beta = .82 / .55$ ）。4. 羞恥感情を経由するコンドーム購入行動意図の阻害は、男性では相互作用混乱の（ $\beta = -.45$ ）、女性では“そのような私は自分らしくない”といった自己イメージ不一致の（ $\beta = -.42$ ）影響が強い。

これらの結果から、コンドーム購入時の羞恥感情を低減させ、コンドーム購入を促進させるためには、コンドーム購入時のふるまい方を教授するトレーニングプログラムが有効であることが示唆された。この知見を利用し、研究1-2が実施された。

② 研究1-2：コンドーム購入トレーニングプログラムの効果

実験参加者に対して行ったトレーニングは、コンドーム購入時のイメージ化、VTRに記録された恥ずかしそうにコンドームを購入している人物の視聴、VTRに記録された堂々とコンドームを購入している人物の視

聴の3点の内容を含んでいた。VTRの視聴によって、コンドーム購入時のふるまい方を直接教授することが可能になる。

実験の結果、トレーニングによってコンドーム購入時の羞恥感情は短期・長期にわたり低減し（ $d = 1.35 / 0.56$ ；図3）、ふるまい方がわからないという相互作用混乱は短期的には低減し（ $d = 1.14 / 0.15$ ；図4）、購入行動意図は長期的には増加する（ $d = 0.04 / 0.74$ ；図5）ことが明らかになった。

今後は、このトレーニングプログラムをより大きな集団に対して実施し、低コストで多数の対象者に対して実行可能な形にしておくことが重要な課題である。

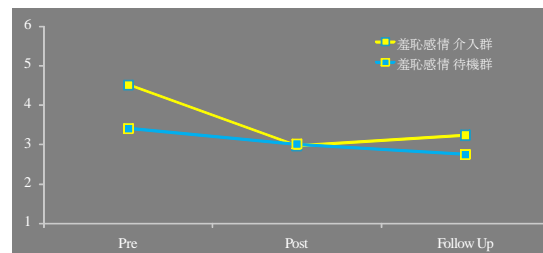


図3 トレーニングによる羞恥感情の低減効果

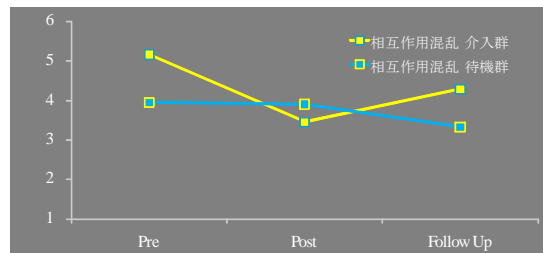


図4 トレーニングによる相互作用混乱の低減効果

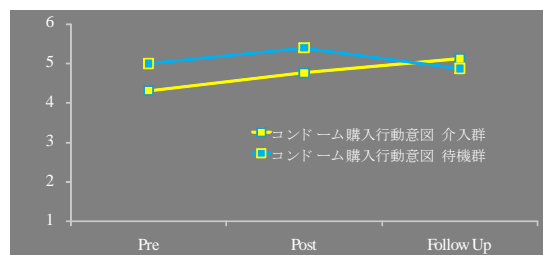


図5 トレーニングによる行動意図の増加効果

(2) コンドーム使用・使用交渉状況における羞恥感情の抑制に関する研究

① 研究2-1：コンドーム使用・使用交渉行動に及ぼす羞恥感情とその発生因の影響

調査の結果、明らかになったのは以下の4点である。1. コンドーム使用・使用交渉行動意図は、男女ともに羞恥感情によって強く阻害されている（男女の順に $\beta = -.41 / -.80$ ）。2. コンドーム使用・使用交渉時には、男女ともに“恥ずかしい”といった種類の羞恥感情を中心に感じているが、それ以外には特に目立った特徴は見られない。3. コンド

ム使用・使用交渉時の羞恥感情は、男性では“パートナーにどのように評価されるか気がかりだ”といった社会的評価懸念によって ($\beta = .65$)、女性では“どのようにふるまったらよいかわからない”といった相互作用混乱によって ($\beta = .49$) 引き起こされている。4. 羞恥感情を経由するコンドーム使用・使用交渉行動意図の阻害は、男性では社会的評価懸念の ($\beta = -.30$)、女性では自己イメージ不一致 ($\beta = -.48$) の影響が強い。

これらの結果から、コンドーム使用・使用交渉時の羞恥感情を低減させ、コンドーム使用や使用交渉を促進させるためのトレーニング方法が考察された。すなわち男性にとっては、コンドーム装着の際の不手際がパートナーからの評価を懸念させ、その結果羞恥感情が生じているのであれば、コンドームの迅速でスムーズな装着のための訓練が羞恥感情の低減に効果的であると予測できる。一方女性に関しては、ふるまい方を直接教授することが考えられる。しかしながらこれらの方法は、集団で行うトレーニング方法としては倫理的に困難でもあるだろう。

② 研究 2-2: コンドーム使用・使用交渉時における羞恥感情の発生因の検討

研究 2-1 で明らかになった通り、コンドーム使用・使用交渉時においては、男性はパートナーからの評価を気にすることで、女性はふるまい方がわからなくなること羞恥感情が発生していた。そこでなぜそのように感じてしまうのかを自由回答形式の調査によって調査した結果、“愛していないと思われるのではないか”、“パートナーに使用を拒否されるのではないか”、“コンドーム使用に不慣れである”、“雰囲気壊れる”といったカテゴリが得られた。

これらのカテゴリを項目化した上で行った調査において、得られた結果は以下の通りである。1. 男女ともに、パートナーからコンドームの使用を拒否されることの懸念が強く存在し、それが評価懸念を通して羞恥感情に影響する (男女の順に $\beta = .70 / .50$)、2. 男女ともに、使用・使用交渉方法がわからないことが理由で相互作用混乱が生じ、それが羞恥感情に影響する (男女の順に $\beta = .38 / .41$)。

これらの結果から、性交渉のパートナーとのコンドーム使用に関する意識の共有化や使用・使用交渉方法の具体的な教授がコンドーム使用・使用交渉時の羞恥感情を低減させ、適切なコンドーム使用の増加に効果的であると推測された。

今後の最大の課題は、この知見を利用した具体的なトレーニングプログラムを開発し、その効果を検証していくことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム購入および使用に関する行動の変容ステージと羞恥感情との関連, 心理学研究, 査読有, 81, 2010, 印刷中
- ② 樋口匡貴・中村菜々子, ビデオフィードバック法によるコンドーム購入トレーニングの効果に関する予備的検討, 日本エイズ学会誌, 査読有, 12, 2010, 印刷中
- ③ 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム購入および使用における公式的規範意識と非公式的規範意識, 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), 査読無, 58, 2009, 145-149
- ④ 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム購入行動に及ぼす羞恥感情とその発生因の影響, 社会心理学研究, 査読有, 25, 2009, 61-69

[学会発表] (計 10 件)

- ① 中村菜々子・樋口匡貴, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (11) ~コンドーム購入行動の変容ステージと性別による羞恥感情・発生因, 購入場所, 恩恵・損失の検討~, 日本行動療法学会, 2009 年 10 月 13 日, 幕張メッセ国際会議場
- ② 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (10) ~VTR を使用したコンドーム購入トレーニングの効果~, 日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第 56 回大会合同大会, 2009 年 10 月 11 日, 大阪大学
- ③ 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (9) ~購入および使用に関する規範意識の構造~, 日本心理学会第 73 回大会 2009 年 8 月 26 日, 立命館大学
- ④ 中村菜々子・樋口匡貴, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (8) ~VTR を使用したコンドーム購入のグループトレーニングの効果~, 日本行動療法学会第 34 回大会, 2008 年 11 月 3 日, 日本教育会館
- ⑤ 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (7) ~友人集団が及ぼすコンドーム購入への影響~, 日本社会心理学会第 49 回大会, 2008 年 11 月 3 日, かごしま県民交流センター
- ⑥ 樋口匡貴・中村菜々子, コンドーム使用促進に関する心理学的研究 (6) ~VTR を使用したコンドーム購入トレーニング

- の効果～，日本心理学会第 72 回大会，
2008 年 9 月 21 日，北海道大学
- ⑦ 中村菜々子・樋口匡貴，コンドーム使用
促進に関する心理学的研究 (5) -コン
ドーム購入行動の変容ステージ，セルフ
エフィカシー，意思決定バランスの予備
的検討-，日本行動療法学会第 33 回大会，
2007 年 12 月 1 日，神戸国際会議場
- ⑧ 樋口匡貴・中村菜々子，コンドーム使用
促進に関する心理学的研究 (4) ～コン
ドーム使用場面における羞恥感情とその
発生因～，日本社会心理学会第 48 回大会，
2007 年 9 月 24 日，早稲田大学戸山キャン
パス
- ⑨ 樋口匡貴・中村菜々子，コンドーム使用
促進に関する心理学的研究 (2) ～コン
ドーム購入に対する変容ステージと羞恥
感情との関連～，日本心理学会第 71 回大
会，2007 年 9 月 19 日，東洋大学白山キ
ャンパス
- ⑩ HIGUCHI, M., & NAKAMURA, N.,
Psychological research related to
the promotion of condom use(3):
The relationship between feelings
of embarrassment and the “stages of
change” in condom use / use
negotiations., The 3rd Asian Congress
of Health Psychology, 2007 年 9 月 2 日，
早稲田大学国際会議場

[図書] (計 3 件)

- ① 樋口匡貴，北大路書房，自己意識的感情
の心理学，2009，126-141
- ② 樋口匡貴，ナカニシヤ出版，心の科学 -
理論から現実社会へ-，2009，155-173
- ③ 樋口匡貴，金子書房，なぜ人は他者が気
になるのか？-人間関係の心理，2008，
46-57

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋口 匡貴 (HIGUCHI MASATAKA)
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60352093

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()

研究者番号：